

解答編

第1問
正解: 2 中国

金魚のはじまり
今から約1600年前に中国で発見された突然変異で赤くなったフナが始まりといわれています。その後、尾ひれが三つ尾になったり、背びれが無いといった現在の形のものが出現したといわれています。



第3問
正解: 2 約150年前

弥富の金魚養殖のはじまり
<今から約150年前の話>
○大和国郡山(奈良県大和郡山市)の金魚商人が熱田の宿(名古屋市の宿)への行商へいったとき、
↓
○前ヶ須(弥富市)に立ち寄り金魚を休ませていたところ、地元の人に分けてもらったのが始まり。
↓
○そして数年後、地元の佐藤宗三郎によって採卵、孵化が成功して、本格的な養殖が始まる。
↓
○地元農家の副業として金魚養殖が広まった。

※弥富周辺は木曾川下流の水郷地帯で、水量・土質共に金魚養殖に最適な場所だった。



第6問
正解: 1 地金(じきん)

○特徴 魚体が白で、口と各ヒレが赤の「六鱗」と呼ばれる配色後ろから見ると×型に見える孔雀(くじゃく)尾
○経歴 和金の突然変異で江戸時代初期に名古屋で生まれる。昭和33年に県天然記念物に指定

金魚が伝来して以降、日本各地で飼育がおこなわれ、地方ごとに特徴ある金魚の品種が生まれました。それら金魚は「地金魚」と呼ばれ、大切に育てられましたが、戦争などいろいろな理由で途絶えてしまったものもいます。




第9問
正解: 1 春(4月から5月)

金魚は種類にもよりますが、3月の終わりにから7月初めくらいまで、卵を産みます。もっとも産卵の盛んな時期は4月から5月くらいです。

金魚の養殖(ようしよく)について、少し見ていきましょう。

第2問
正解: 1 室町(むろまち)時代

日本に来たのは江戸時代中期に出版された「金魚養玩草(きんぎょそだてくさ)」という書物によると、室町時代の文亀2年(1502年)に現在の大府堺市へ中国から渡来したとされています。




出典: 金魚大全

第4問
正解: 1 約700ひき

金魚日本一大会は、平成6年から始まった金魚の品評会です。弥富で金魚を養殖している若者たちが、日本一の産地としてを誇れることをしようと自分たちで考えた手作りの大会です。いまでは北海道や九州からも出品に来る方みえる大きな大会に育ちました。



第7問
正解: 3 ブリストル朱文金(しゅぶんきん)




日本の朱文金をもとに、イギリス西部のブリストル地方で改良された品種で、1929年に誕生したといわれています。ハート型の尾が特徴です。

ちなみに「コメット」は、アメリカで琉金の中から発見されたもの。スマートな体型からこの名(コメット:彗星)がつけられたといわれています。

第10問
正解: 1 弥富金魚水族館

弥富市は観光発信拠点として、令和4年10月、弥富市役所のお隣に「弥富金魚水族館(YaToMi AQUA)」を開設しました。金魚の展示はもちろん、常設の金魚すくいスペースも設置されており、今年10月には1周年記念イベントも考えられているそうです。



養殖が盛んになったのは

はじめ、金魚はとっても貴重で、ごく一部のお金持ちしか買えません。しかし江戸時代後期には養殖も盛んになったことから、庶民にも広まり、金魚売りや金魚すくいなども始まりました。



江戸時代の金魚すくい
江戸時代の金魚売り
出典: 金魚大全

第5問
正解: 2 輸入(ゆにゆう)ものという意味

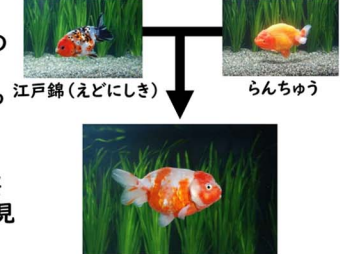
この品種が入った江戸時代、舶来もの(輸入もの)を、「オランダ物」と呼んでいたためその名がつけられたといわれています。りゅうきんの突然変異種で、生まれは中国です。



オランダシンガシラ

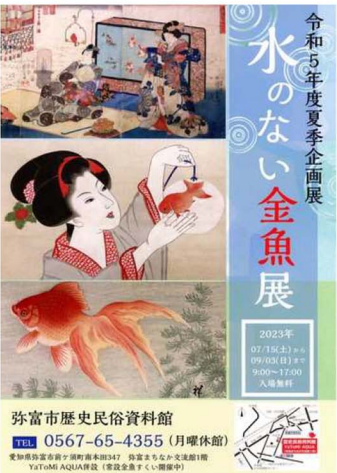
第8問
正解: 1 桜錦(さくらにしき)

愛知県弥富町(当時)の深見さんという方が「江戸錦」の肉瘤(コブ)をもっと立派にしようと肉瘤の立派な「らんちゅう」とかけあわせたときに、赤色の強い魚が生まれました。その色合いが金魚の体に桜の花びらを散りばめたように見えたので、「桜錦」と名付けたそうです。



江戸錦(えどにしき) らんちゅう
桜錦(さくらにしき)

令和5年度夏季企画展
水のない金魚展

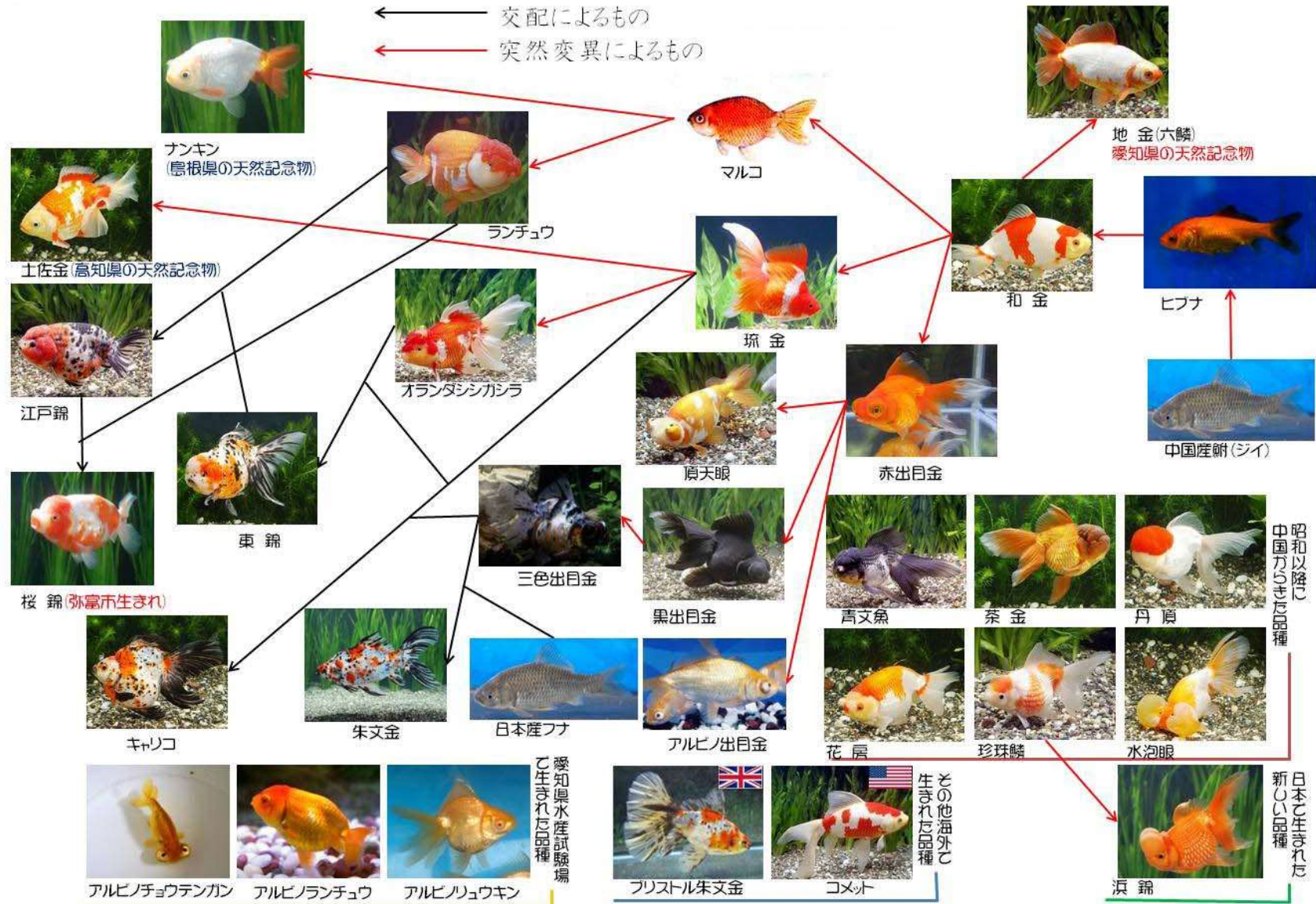


2023年
07/14(土) ~ 09/02(日)
09:00~17:00
入場無料

弥富市歴史民俗資料館
TEL 0567-65-4355 (月曜休館)



金魚の系統図



金魚の養殖

金魚養殖のはなし

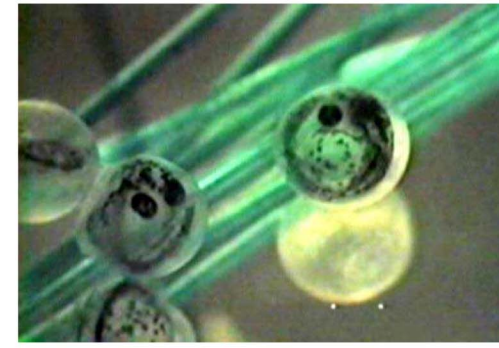


春の仕事:金魚の採卵



養殖池に魚巣を設置し、金魚が卵をうむ準備をします

春の仕事:金魚のふ化



卵は3日くらいするとこのように目が見えるようになります(はつがんらん)

春の仕事:稚魚の池入れ



集めたちぎよを池に放します。

春の仕事:池の準備



金魚の養殖をするために一番最初にすることは池の水を抜いて消石灰で池を消毒し、干しておくことです

春の仕事:金魚の採卵



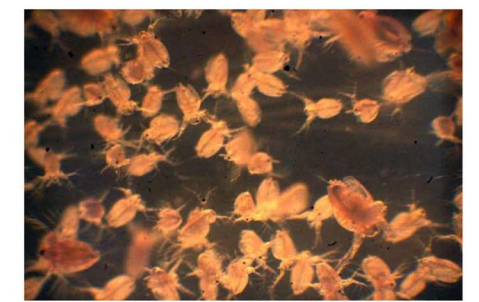
金魚は早朝に卵をうみます。魚巣にはこのように卵がうみつかります

春の仕事:金魚のふ化



生れたばかりのちぎよは小さく透明です。

春の仕事:稚魚の池入れ



あらかじめ水を入れておいた養殖池には、ちぎよの餌になるミジンコが発生していて、ちぎよはそれを食べて大きくなります。

春の仕事:稚魚の池入れ



採卵にあわせて、干してあった養殖池に水を入れて準備をします。

春の仕事:金魚のふ化



卵のうみつかった魚巣は、卵を親に食べられないよう別の池に移します。

春の仕事:稚魚の池入れ



生れてから3日ほどすると、口も開いてエサが食べられるようになるので、ちぎよを集めます

春の仕事:稚魚の池入れ



池のミジンコを食べ終えた頃から、このような粉末や固形のエサを与えます

夏の仕事:稚魚の選別(1回目)



稚魚を池に放してから1~2カ月ほどすると、「す」という道具を使って、池の稚魚を集めます

夏の仕事:稚魚の選別(2回目)



7月の終わりごろから始まる2回目は、金魚らしく色変りしてから行い、真っ赤なものや赤白の更紗模様のもを残します。

金魚卸売市場へ



弥富金魚卸売市場



東海観賞魚卸売市場



日本金魚卸売市場

弥富市内には、金魚の卸売市場が3か所あり、日本全国から仲買人さんがやってきます。

夏の仕事:稚魚の選別(1回目)



取り上げたちぎよは、ふなのような色をしています。

秋以降の仕事:出荷



秋くらいから少しずつ売りに出します。取り上げは池に網を入れて行います。

金魚卸売市場へ



セリを待つ「かんこ」に入った金魚



セリのため金魚を「かんこ」に入れる

梱包した金魚は、市場の始まる朝に持ちこみます。競りのために「かんこ」と呼ばれる入れ物に金魚を入れます。

夏の仕事:稚魚の選別(1回目)



ちぎよは、1尾、1尾、大きさ、背びれや尾びれの形などを見て選別していきます。

秋以降の仕事:出荷



出荷前の選別

出荷のため梱包

取り上げた金魚は、大きさや色柄で選別し、梱包して、市場へ出荷する準備をします。

金魚卸売市場へ



競りは昼から始まります。

市場の見学はできます

弥富市歴民族資料館へ問い合わせさせていただくと開催日やボランティアガイドさんを紹介していただけます